

【氏名】 徐 蘇斌

【所属大学院】 東京大学大学院

【研究題目】

解放初期における工学系留学生の帰国後の活動 -中国の都市建設とその成立基盤-

【研究の目的】

現在、アメリカ・イギリス・日本などの先進国では、多くのアジア諸国の留学生を受け入れる政策を実施している。日本の文部科学省が1983年から進めてきた「留学生受け入れ10万人計画」の目標が2003年5月に109,508人となった。内訳は中国人の70,814人を筆頭に、韓国人15,871人、台湾4,235人、マレーシア、タイ、インドネシアと続いている。今や、在日中国人留学生の数は、アメリカ留学の中国人64,757人を越えている。また、中国国内の留学ブームもあり、日本への中国人留学生数が今後ますます増加するとの予測もある。

一方、こうした留学生の事績を辿る留学史の研究は、日中近代交流史研究において多大の成果を上げているが、工学系留学生に関する研究は実に立ち後れている。とりわけ、1930-40年代の留学生は鉄道・機械・土木・建築・応用化学・紡績などの工学領域全般に亘っており、近代中国の国土建設に果たした役割の大きさは多大なものがある。

その意味で、当該留学生の日本での学習の実態と帰国後の活動の実態解明は、問わなければならない不可避的な問題と言える。

本研究では、これまで看過されてきた工学系中国人留学生の日本での学習の実態と、帰国後の活動を解明することを目指している。また、本研究と表裏をなす事柄であるが、申請者自身も、一工学系留学生として日本に留学し、多くの工学系留学生と接した。現在の留学生たちは、日本で工学技術を学びながら、また如何に人生を歩むか、という大きな課題にも直面している。この研究は、戦前期の工学系留学生の研究を通して、未来への啓示を発見しようという試みでもある。

【研究内容・方法】

19世紀末から20世紀におけるアジアの近代化と言えば、産業の近代化に象徴される。戦前において、多くの留学生の留学目的は、日本の文化よりも、工学技術の習得にあったので、工学系留学生の存在の解明は無視できない。本研究は、工学系留学生の活動における長いスパンの中に、現在中国の都市基盤となっている解放初期における中国の都市建設と留学生との関連性を捉え、以下のような内容の研究を行った。

I. 1930年代の留日中国人留学生

- (1) 工学留学生の受け入れ状況
- (2) 日本の都市計画学の影響—留学生の卒業論文を通して

II. 解放初期における中国の都市建設—首都計画をめぐって

- (1) 日本占領時期における首都計画と留学生
- (2) 戦後のイデオロギーと新計画
- (3) 住宅区の計画と住宅建設

III. 天安門広場及びその周辺の建設

- (1) 建築と「社会主義」・「民族主義」
- (2) 人民大会堂—巨大な社会主義モニュメント

上記の内容を博士論文(『中国における都市・建築の近代化と日本』2005年3月)の一部分として纏めた。I. 1930年代の留日中国人留学生(第4章)、II. 解放初期における中国の都市建設—首都計画をめぐって(第4、5、7、8章)、III. 天安門広場及びその周辺の建設(第8章)。

上記の内容に沿って、以下のような研究方法を用いた。

1. 資料の収集

戦前留学生を受け入れた日本の各大学の図書館、資料館、また、各公共図書館などに収蔵されている留学生に関する名簿、卒業写真集、卒業論文を蒐集した。

2. インタビュー

留学生の遺族、および関係者にインタビューを行った。

3. データ・ベースの作成

統計的手法により、名簿・人名辞典・関係資料などに基づいて留学生データ(約2,000件)を作成した。留学生の出身地、来日時間、大学入学時間、卒業時間、在学様子、また帰国後の勤め先、著作、作品などが含まれている。この部分は博士論文の付篇として作成された。

4. 事例研究

事例研究は趙冬日、劉敦楨、柳士英に絞って纏めた(博士論文第5、7、8章)。

【結論・考察】

中国の近代化は、大きく2つの力によって形成されたと考えられる。1つは中国の伝統を継承していこうとする力であり、もう1つは外来の刺激を契機とした力である。この2つの力は、いずれも近代化のプロセスを解明する上で重要な鍵となるものと考えている。本研究では、中国における近代化過程の詳細な内容を検討するため、外来の影響の「受容」

形態に着目した。

本研究では、工学系留学生の個人データ（約 2,000 件）の作成を行い、それに基づいて工学系留学生の輪廓を描いた。工学系留学生の総留学生に占める割合は約 10-20%にのぼるが、出身校では東京高等工業学校の人数が最も多い。本研究では、最も人数の多い建設系（建築、土木、建設科）留学生を対象にその具体的内容を明らかにした。とくに、東京高等工業学校（東京工業大学を含む）の建築科を例にして、留学生の日本での学習状況、帰国後の勤務状況などを考察し、残された卒業論文などから、留学生の建築観における日本の影響を解明した。

帰国後、留学生たちは本国に活動の舞台を移した。本研究では趙冬日、劉敦楨、柳士英の3名に絞って考察を行った。趙を例にとれば、日本で受けた教育には、モダニズム建築もあれば、東洋建築教育もあった。それを反映してか、卒業設計はモダニズム建築で、卒業論文は『中国建築の装飾に就いて』であった。解放初期、中国ではモダニズムの居場所がなくなり、民族様式や、折衷主義様式の建築の設計を試みた。民族様式を表現するため、高いコストを支払ったのである。一方、建国初期における資金不足の問題もあり、趙もローコスト住宅を建設した。こうして、様式と経済との矛盾は解決しないまま建国 10 周年を迎え、趙は人民大会堂の設計を手掛けた。そこでは、「大屋根」の浪費批判を避けて折衷主義様式で、かつ巨大な尺度で中国人民の偉大さを表現した。そこには、その時代のイデオロギーと建築、経済との矛盾が満ちている。彼の作品はそうした矛盾を如実に表現しているのである。

留学生たちの都市・建築における「受容」は、中国の歴史、また社会発展に応じて試みられた再創造への壮大な実験でもあった。その再創造への営みこそ、現代へと繋がる過度期における挑戦の姿勢であり、将来へ向けた検討課題と言えよう。